

愛媛県今治市

私のしまなみ ミュージアム紀行

村上三島記念館

伯方ふるさと歴史公園

吉海郷土文化センター

玉川近代美術館

今治城

波方歴史民俗資料館

大西藤山歴史資料館

朝倉ふるさと美術古墳館

伊東豊雄建築ミュージアム

アーティスト 日比野克彦

ところミュージアム大三島

イラストレーター 安西水丸

岩田健母と子のミュージアム

ヴァイオリニスト 千住真理子

大三島美術館

編集者・美術ジャーナリスト 鈴木芳雄

村上水軍博物館

歴史アイドル 美甘子

河野美術館

美術家 田窪恭治



しまなみ ミュージアムを旅する

広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ、瀬戸内しまなみ海道沿線に、いくつものミュージアムがあるのをご存知だろうか。自然に囲まれた抜群のロケーションとユニークな展示で、旅行く人たちの心を刺激するミュージアムについて各界の方たちに寄稿していただいた。

文○阿部美岐子 Text:Abe Mikiko 写真○国貞誠 Photos:Kunisada Makoto



伊東豊雄 建築ミュージアム

建築家伊東豊雄が、自身の哲学を表現した施設。多面体を組み合わせたユニークなデザイン、展示棟、ステイラメントには、垂直な壁が全くない。ROOM（ルーム）と呼ばれる三つの展示室があり、その一つには深い青に塗った壁面に、これまで伊東氏が手がけた建物の模型が島のように浮かんでいる。さらに空から吊るされた多面体の透明な箱には、未来の都市の建物模型が入っており、伊東氏の脳内を覗き見ているような錯覚に陥る。別棟のシルバーハットは、伊東氏の自邸を再生したアーカイブ兼ワークショップ棟だ。

日比野克彦

アーティスト

しまなみ海道を初めて訪れた時は大雨でした。「天気が良ければいい景色なんですよ」「晴れていれば「望です」そんな言葉を取クシーの運転手さんがしきりに言う。とても残念そうにというか、申し訳なさそうに繰り返し繰り返し、「晴れてればねー」とちらりちらりと外の風景を見ながら、自分に言い聞かせるように言う。タラレバは言うてもしょうがないと解つていてもついつい口に出してしまうのが人間の弱い所というか、人間臭いところではある。しかし聞いている私は「向にその残念さが解らない。運転手さんは私にその風景を紹介し、「すごいですねー」のリアクションが欲しかったのは解るのですが、いかなせん私は初めて訪れる場所なので、雨にむせている白ちやけている霧の中に何があるのかは知らないで、この雨を疎む理由もなく、どちらかと言えば「白い霧が幻想的

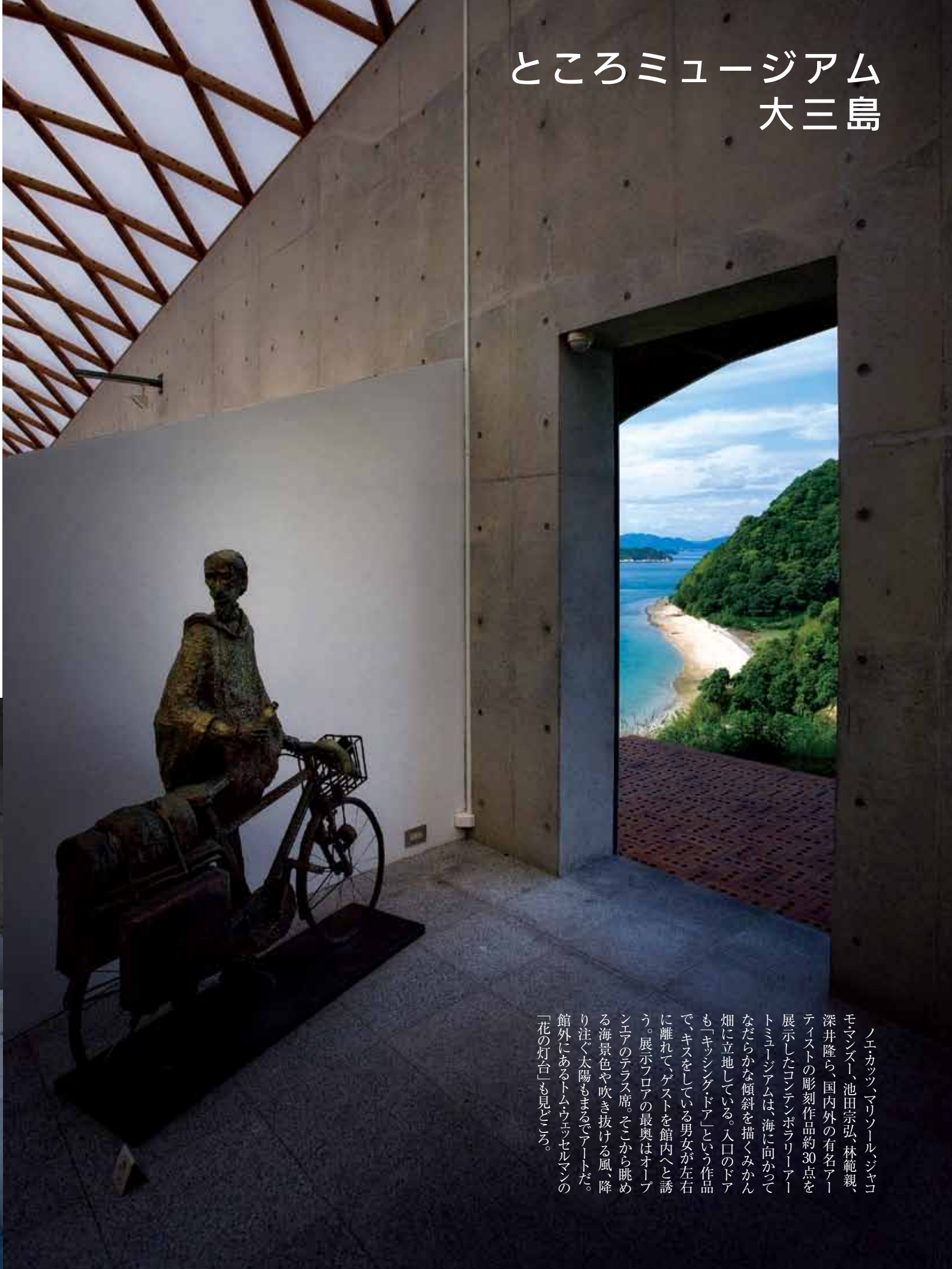
いいですねー」と霧を褒めても良いぐらいの気分である。でもしきりに運転手さんが言うので「そうですねー」と気のない返事をしておく。海が見えないのでいくつかの島をわたっているのがわからない。もう四国に入ったのかどうかわからない。雨はさらに激しくなっていく。間違はなく言えることは、この天気だったら船は欠航になるであろうから、橋がない時代だったら私は四国入りはできなかったであろうということ。橋は天候に左右されることなく人間の日常生活を安定させてくれる。こんな視点から言えば、この大雨の中で橋を渡るということは、最も重要な橋の意義を実感させる渡り方といえるのではないだろうか。だから運転手さんも残念がついているばかりでなく、この雨の中でも海を渡れることを自慢したほうがよいですよ。



◎日比野克彦(ひびのかつひこ)
1958年岐阜市生まれ。東京藝術大学大学院修了。80年代に領域横断的、時代を映す作風で注目される。作品制作の他、身体を媒体に表現し、自己の可能性を追求し続ける。各地域の参加者と共同制作を行い社会で芸術が機能する仕組みを創出する。ぎふ清流国体・ぎふ清流大会総合プロデューサーを務める。日本サッカー協会理事。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。 写真○後藤充



ところミュージアム 大三島



ノエカツ、マリソール、ジャコモ・マンズー、池田宗弘、林範親、深井隆ら、国内外の有名アーティストの彫刻作品約30点を展示したコンテンポラリーアートミュージアムは、海に向かってなだらかな傾斜を描くみかん畑に立地している。入口のドアも「ギンギン・ドア」という作品で、キスをしている男女が左右に離れて、ゲストを館内へと誘う。展示フロアの最奥はオープンエアのテラス席。そこから眺める海景色や吹き抜ける風、降り注ぐ太陽もまるでアートだ。館外にあるトム・ウェッセルマンの「花の灯台」も見どころ。

安西水丸

イラストレーター

この美術館は展示されている作品もユニークだが、その立地条件がまた素晴らしい。館内のオープンテラスは瀬戸内の島々を望めるビューポイントだ。訪ねたのは二〇〇六年の四月だった。あちこちで桜が満開だった。

個人的なことを言えば、この日はとても寒く、カメラマンが館内を撮影中ぼくはひたすら寒さに耐えていた。チケットを扱う入口の女性も、足もとにストーブを置いていたような記憶がある。こんなことを書く必要性はないとおもうが、訪れる方々に、ぼくのような寒さを味あわせたくないなので、敢えて記しておく。

美術館所蔵の作品はユニークだ。大好きな、トム・ウェッセルマン、ノエ・カツツがある。サン・ピエトロ寺院の大聖堂の内扉を十四年かけて制作したジャコモ・マンズーの作品も見えたらう。林範親、深井隆の立体作品もここならではの異彩を放っている。季節を選び美術館、作品、風景を楽しんで欲しい。



◎安西水丸 (あんざいみずまる)
1942年東京都生まれ。電通、NYのデザインスタジオADAC、平凡社でADを務めた後、フリーに。朝日広告賞、毎日広告賞などを受賞。小説・エッセイなども執筆。近著に『ぞうのふうせんやさん』『大衆食堂へ行こう』『青豆とうふ』（和田誠と共著）など。



千住真理子

ヴァイオリニスト

私が岩田健先生に教えて頂いたのは、小学校のころだ。慶應義塾幼稚舎に通っていた私は、そこで図工の先生をしていた岩田先生がすぐに好きになった。誰が見ても図工が下手な私だったのに、岩田先生は大きな動作を交えて「素晴らしく独創的です!!」と褒めて下さったし、お休み時間の先生の膝の上は、いつも友だちととりっこだった。

そんな先生の作品に常に触れながらの6年間の日々は、生徒たちの感性を伸びやかに育んだ。その中で育った長兄の博は絵の才能を開花させ日本画家になったし、次兄の明は自由な創造的世界を膨らませて作曲家になり、私はヴァイオリニストになった。

先生の彫刻作品が今「母と子のミュージアム」にある。柔らかな日差しを浴びた中庭に、いくつもの愛らしい子どもや優しい母の姿が存在しているのである。そのどの作品も、慈愛に満ちた表情であり、今にも動き出しそうな気配がみなぎっている。光栄にもそこで流れている音楽は、このミュージアムのために兄（明）が作曲したものであり、私が愛器のストラディバリウスで弾いている音である。

癒やされる空間に包まれに、是非「岩田健母と子のミュージアム」を訪れて欲しい。誰の心にもある「失われた遠い日の記憶」が甦り、すべてがたまたなく愛おしい気持ちになるだろう。

鈴木芳雄

編集者・美術ジャーナリスト

絵に「会う」というのは、実は旅の楽しみだと思っている。教科書や画集、テレビなどで知った絵を見るためにわざわざ出かけるという旅もあるし、絵の方が旅をして最寄りの美術館にやってくる、絵の方がある。その時はもちろん「はるばるようこそ」と歓迎する（美術館に行く）。そういう用意周到な旅もあれば、予想もせずに素晴らしい絵に出会ってしまうこともある。僕にとって加山又造「火の島」はそんなふうに思いがけず出会えた作品の一つだった。

加山氏の作品はもちろんいくつか実物で見えて知っていたけれど、こんな名作が突然目の前に現れた時の驚きと喜びは、たとえようもない。屏風に岩絵の具という日本画の伝統的な手法で描きながら、対象だけに絞り込み、構図も簡潔で色数も抑えた現代的な感覚によって伝わる、力強い堂々とした風景。存在感に圧倒された。大三島美術館は僕にとって大切な旅先であり続けている。



©鈴木芳雄(すずきよしお)
2001年より「BRUTUS」(マガジンハウス)の副編集長を約10年務める。「仏像」「杉本博司を知っていますか?」「すいすい理解(わか)る現代アート」などヒット企画を飛ばし、フリーランスとなった今も「フクヘン」の愛称で親しまれる。 写真○小野祐次

岩田健 母と子の ミュージアム

現在は廃校となった海辺の小学校の校庭。かつて子どもたちの声が響いていたこの場所に、彫刻家・岩田健の手による母子像など44作品を展示している。慶應義塾幼稚舎の教諭であった岩田氏だけに、その作品からは子どもたちに向けられた慈しみや愛情が感じられ、温かい気分させてくれる。半屋外の円形スペースに、1日9回響く「時を告げる音楽」も楽しみ。



©千住真理子(せんじゅまりこ)
2歳3カ月よりヴァイオリンを始め、1973年に全日本学生音楽コンクール小学生の部で優勝に輝く。1975年、12歳の時にN響と共演してプロデビュー。以来国内外での演奏活動の傍ら、NHKの司会や執筆など多方面で活躍。またチャリティーコンサートなど社会活動にも積極的に参加している。日本画家の千住博氏、作曲家の千住明氏とともに芸術家三兄妹としても注目を集める。 写真○富田真光(vale.)

大三島美術館

大屋根に白壁が印象的な外観もさることながら、壁面に和紙を貼った館内も癒やしに満ちている。収蔵品は中島千波、竹内浩一、加山又造ら昭和15年以降に生まれた日本画家の作品を中心としており、現代の日本画の流れを知ることができる。また、開館10周年を記念して増設した田淵俊夫記念室には、本作だけではなく素描や下図なども展示しており、非常に興味深い。

村上水軍博物館

戦国時代、海の名として瀬戸内海の覇権を握っていた村上水軍。古文書や復元品、近辺から出土した遺構や遺物をもとに、その活躍の軌跡をたどる歴史ミュージアムがここ。注目は、貴重なお宝が並ぶ村上家記念室。修復を経て現代に蘇った甲冑は、独特のオーラをまとうている。また、水軍にまつわる多彩な図書を自由に閲覧できる海賊ライブラリーもここならではの。



◎美甘子(みかこ)

1982年愛媛県大三島生まれ。歴史アイドルとして、テレビ・雑誌・講演等で活躍。著書「歴女・私の愛する戦国武将」「戦国武将とお姫様の残酷物語」など。「歴史人」(KKベストセラーズ)にて、「歴っしゅ!新聞」連載中。<http://mikako.chu.jp/>

美甘子

歴史アイドル

取材や講演の際、自分の故郷・大三島のことを話すと、歴史好きの方には「あの大三島!」と言われることが多い。とても誇らしい気持ちになります。大山祇神社には、戦勝祈願のために源義経や頼朝たちが鎧や刀を奉納しており、神社内の宝物館には日本の国宝・重要文化財に指定された武器甲冑類の約4割があるとか。とても素晴らしいことだと思います。また、大三島を守ったヒロイン鶴姫は、村上水軍傘下の三島水軍を率いて中国地方の大内軍と戦ったと伝わっています。ほかにも村上水軍にまつわるエピソードは数多く残っており、大三島に「村上」という姓が多いのも納得です。

大島の宮窪町にある村上水軍博物館は、村上水軍の歴史や実態を楽しく学べる施設。水軍は「海賊」とも呼ばれるため、ちよつと怖いイメージを持つ人もいるでしょうが、村上水軍は好んで戦を仕掛けていたわけではありません。雇われた時だけ参加し、戦のない平時は、海上の安全を取り締まり、「上」の字を書いた通行許可証を発行。瀬戸内海を通る船にとって心強い存在でした。

博物館の広い窓からは瀬戸内海が望でき、能島水軍の拠点となった能島を見ることが出来ます。ライブラリーには海賊にまつわる資料がたくさん。講座もあるので参加してみるのをおすすめです。子どもたちに大人気なのが、甲冑を着ることが出来る「わくわく探検ルーム」。五感をフルに使って、水軍の歴史に親しんでもらいたいですね。

田窪恭治

美術家

私は今から63年前、^{いまぼり}今治で生まれました。私の父も祖父も今治生まれです。

子どもの頃、祖父は今治を「いまはる」と呼んでいました。今治の語源がどこから来てどちらの発音が正しいのか私には分かりませんが、この地で生まれ育った人々は心穏やかで創造力旺盛な方が多く、世界に誇る造船技術、品質の良いタオルや美しい漆器などの生産地としても有名です。

そんな今治市の中心部にある河野美術館のコレクションは、素晴らしいものです。土佐派や狩野派の巨匠たちによる掛け軸や屏風、古今の文人墨客による書など目を見張るものばかりです。また、近年では学芸員さんのご努力もあり、「郷土出身作家による現代美術展」が毎年開催され、来年は記念すべき25回目となると聞いています。

昭和43年に今治出身の実業家河野信一氏のコレクションを公開するために開館された「河野信一記念文化館」は昭和63年にその部を改築し、現代美術なども展示出来る今治市河野美術館となりました。再生を繰り返しながら成長してきた河野美術館は半世紀近くの時を経て、現在ある意味では第三の創世記にきているのではないかと思います。さらに施設の再構築や現代作家の作品収集をも視野に入れながら、しなみ文化ゾーンともいえる地域にあつて、老舗の文化拠点として国内のみならず世界に愛媛の文化を発信し続けていただきたいと願っております。

河野美術館

今治市出身の実業家・河野信一の寄付により設立された美術館。画人のみならず戦国武将や僧侶、茶人、俳人など平安時代から現代にかけて活躍した人々が遺した掛け軸や屏風、書物、原稿など1万2000点を収蔵。定期的に展示作品を入れ替えているので、訪れるたびに新たな作品に出逢える。敷地内には、東京の河野邸にあった茶室を移築。茶会なども開催されている。

◎田窪恭治(たくぼきょうじ)

1949年愛媛県今治市生まれ。1989年から1999年までフランス・ノルマンディ地方の古い礼拝堂を再生するプロジェクトを実施。2000年から2011年まで金刀比羅宮の文化顧問として「琴平山再生計画」を手掛け、現在、新たなプロジェクトを実施中。多摩美術大学客員教授、聖心女子大講師。





伊東豊雄建築ミュージアム

今治市大三島町浦戸2418
☎0897-74-7220
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日)
料／一般800円



岩田健母と子のミュージアム

今治市大三島町宗方5208-2
☎0897-83-0383
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日)
料／一般300円



大西藤山歴史資料館

昭和42年、斎灘を見下ろす丘陵地で発見された妙見山古墳(国史跡)。この古墳を中心に整備された公園には、埋葬施設を復元した資料館があり、出土した鉄剣や鏡などの副葬品も展示。資料館から徒歩約10分の日古墳も必見だ。

今治市大西町宮脇乙579-1
☎0898-53-2313
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日) 料／一般300円



ところミュージアム大三島

今治市大三島町浦戸2362-3
☎0897-83-0380
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日)
料／一般300円



大三島美術館

今治市大三島町宮浦9099-1
☎0897-82-1234
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日)
料／一般500円



吉海郷土文化センター

地元産の大島石を使った建物には、テーマ別の5つの展示室がある。注目は明治34年に大島で生まれた画家・野間仁根の展示室。幻想的な作風の油彩や水彩画に加え、作画に使用した器具や材料、愛用品などを展示している。

今治市吉海町福田1290 ☎0897-84-2566
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日)
料／一般300円



波方歴史民俗資料館

野球場やテニスコートが整備された波方公園の一角にあり、江口貝塚など地域の遺跡からの出土品や民具などを展示。展示棟は茅葺き民家と白壁の土蔵の2棟で、建物そのものも趣がある。じっくり見学し、波方地方の生活文化を学びたい。

今治市波方町樋口乙730-1
☎0898-41-7111(波方支所)
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日) 料／無料



波方歴史民俗資料館

なみかた はしはま

今治

おおにし

大西藤山歴史資料館

今治IC

玉川近代美術館

今治市玉川町大野甲86-4
☎0898-55-2738
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日)
料／一般500円

朝倉ふるさと美術古墳館

今治湯ノ浦IC

ところミュージアム大三島

伊東豊雄建築ミュージアム

岩田健母と子のミュージアム

大三島美術館

吉海郷土文化センター

村上三島記念館

村上水軍博物館

伯方ふるさと歴史公園

伯方ふるさと歴史公園

村上水軍博物館

村上水軍博物館

今治城

今治城

朝倉ふるさと美術古墳館

朝倉ふるさと美術古墳館

河野美術館

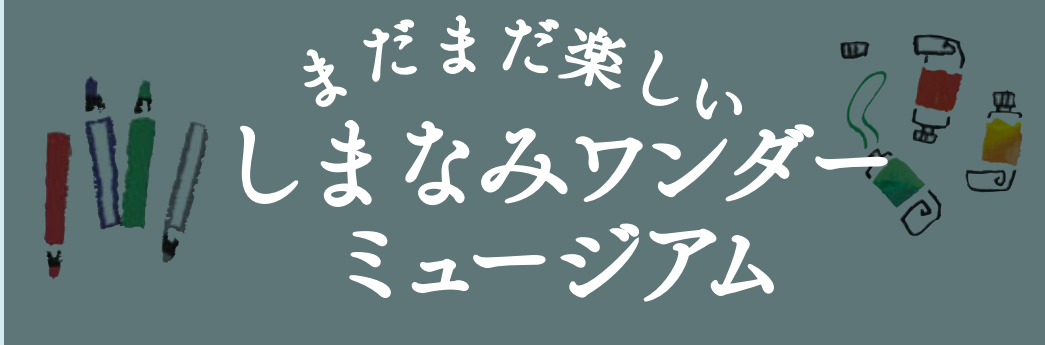
河野美術館

今治市旭町1-48 ☎0898-23-3810
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日) 料／一般300円

河野美術館

●定休日(休館日)は定期の休業を表しています。なお、年末年始の休館や展示入れ替えなどで臨時に休館する場合もございます。

●本誌掲載の情報は2012年8月1日現在の情報です。変更になる場合もございますのでご利用の際は予めお問い合わせください。



しまなみワンダーミュージアム

文化勲章を受章した書家・村上三島は大三島出身。三島の作品や愛用品を中心に、著名な現代書家の作品をコレクション。さらに館内には大阪府にあった三島のアトリエを移設再現しており、その偉業を偲ぶことができる。

今治市上浦町井口7505
☎0897-87-4288
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日)
料／一般500円

村上三島記念館

村上三島記念館

村上水軍博物館

今治市宮窪町宮窪1285
☎0897-74-1065
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日) 料／一般300円

村上水軍博物館

伯方ふるさと歴史公園

伯方ふるさと歴史公園

山上にたたずむ三層の木浦城は、中世前期の山城を想像復元したもの。館内には近辺からの出土品を展示している。最上階からは、箱庭のようなしまなみの景色を望む。隣接する資料館には、塩田や海運業で栄えた伯方島の歴史民俗資料を展示。

今治市伯方町木浦甲546
☎0897-72-2374
開／9:00～17:00 休／月曜(祝日の場合は翌日) 料／無料

伯方ふるさと歴史公園

村上水軍博物館

村上水軍博物館

今治城

今治城

朝倉ふるさと美術古墳館

朝倉ふるさと美術古墳館

河野美術館

●定休日(休館日)は定期の休業を表しています。なお、年末年始の休館や展示入れ替えなどで臨時に休館する場合もございます。

●本誌掲載の情報は2012年8月1日現在の情報です。変更になる場合もございますのでご利用の際は予めお問い合わせください。